

間を短縮することができるとされています。

4. 堆肥舎における一次処理

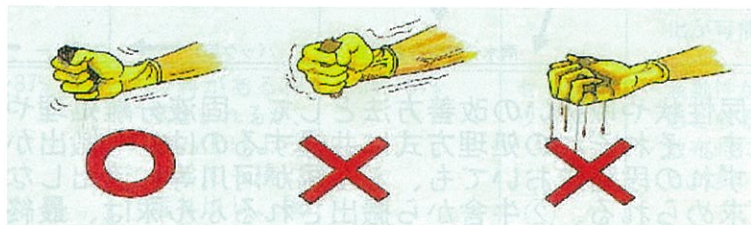
畜舎で排泄されたふん尿は、敷料との混合物となって更じょく作業により堆肥舎に持ち込まれます。持ち込まれた敷料と混合されたふん尿の性状は飼養体系により異なり、容積及び重量の判断は難しいのですが、ふんの量、敷料の種類等の目視とバケットでの搬出回数や搬入トラックでの台数で推定し、堆肥化処理作業においては容積重を確認してから開始します。

堆肥化の一次処理作業は良好な発酵に求められる水分調整となります。適切な水分率は、発酵時の外気温等によって異なりますので、ここでは寒冷地である家畜改良センター十勝牧場の主な事例を参考に説明します。

(1) 水分調整

ふん尿の堆肥化に適した水分率は概ね60～70%で、この状態のふん尿は畜舎から搬出し堆積しておくで、尿など排汁がにじみ出る程度です。

ちなみに水分率60%とは手で握りしめて、湿り気を感じるが指の間等から水が出てこない程度であります。



水分率が高すぎたり、低すぎると好気性微生物が活動できないので、水分調整を行うこととなります。水分を下げるには次の方法があります。

- ① 堆肥舎のエプロン等で天日乾燥させる。
- ② オガクズなどの水分調整資材を加える。
- ③ 戻し堆肥を混合する。

等ですが、オガクズ、戻し堆肥が十分確保されていない場合には、処理中途の堆肥原料を混合するなど考えられます。水分調整資材は、吸水する資材を選択することが必要です。

ふん尿・敷料混合物（以下「堆肥原料」）の水分が少ない場合には、散水による加水が必要となります。堆肥原料の吸水性が悪いと堆積物の表面を流れ落ちるだけになってしまいますし、散水しすぎた場合には排汁がにじみ出ることとなり、水分調整の役割を果たさないこととなります。

堆肥原料の水分調整には、微生物を活用する点から戻し堆肥の添加が有効です。添加に当たっては、堆肥原料の水分含有量及びふんの量を確認しながら適宜調整しますが、冬季は夏季に比較して発酵が遅いことから、水

分含有量が少なくなるよう調整し、発酵の促進を図ります。

また、冬季は発酵温度が上昇すると蒸気が堆肥の表面上部で外気温に冷やされて水滴となって滞留し堆肥内を水滴が下降して、排汁として流れ出ることがあり、このような状況が見られる場合には、再度水分調整のために副資材を混合する必要があります。

戻し堆肥を水分調整資材として活用する場合には、水分率の低い（40%以下）ものが適しています。但し、このような発酵処理済み堆肥は、発酵ふんや敷料資材が分解して粒子が細かくなっているため、多量に添加すると通気性を低下させることがありますので注意が必要です。

(2) 均一な混合

堆肥化では軽視されがちですが、副資材の混合や切り返しによる水分調整では、均一な混合が重要なポイントです。混合が均一に行われない場合は発酵ムラが生じるため、堆肥化に長期間要したり均一な発酵が行われないことから、堆肥としての使用時に作物の生育を阻害すること等も危惧されます。容積重の均一性や通気性の確保のためにも注意が必要です。

均一な混合



(3) 堆積方法と高さ

好気性発酵処理の場合、微生物は呼吸しているので酸素が必要です。酸素の供給のためには、堆肥の中に空気が流通できるすき間をつくることが重要です。ふん尿中の水分含有量が適正であっても堆積重で押しつぶされ、空気の流通が阻害されると微生物は活動できず、十分な発酵は行われません。

適切なふん尿の堆積方法は、バケット等より落下させる時、一度に多量を落下させず、少量ずつ落下させるように堆積することで空隙が確保されます。この時の容積重は0.5 kg／リットルに近づけ、堆積の高さは、発酵熱を保温するという観点から1 m以上の高さとして発酵温度を蓄積することが重要です。また、2 mをはるかに越える堆積は、堆積物の自重により、すき間がなくなるので堆積中央部の通気性が悪くなり、発酵が不均一になるので好ましくありません。

(4) 切り返し

切り返し作業は、好気性菌への酸素の供給と、資材の均一混合の両方の役割があり、一次発酵処理の初期は週1回程度行う必要があります。冬季の場合あまり頻繁に行うと外気により内部温度が下がり、発酵を遅らせる原因となります。

堆肥原料の性状にもよりますが、順調であれば堆積後2～3日目には堆肥内で微生物の活動が活発となり、発酵熱で温度が60℃以上になります。堆肥舎で堆積した場合は、乾燥する表面近くや酸素供給できない中央部などでは温度が上がりきらない箇所も出現しますので、堆肥原料の全体が60℃以上になるよう繰り返し均一になるよう混合しながら切り返しを行うことが発酵促進の重要なポイントです。

なお、堆積物中の好気性菌が活動出来ない状態のまま放置すると原料の中が嫌気性に変化して悪臭がしたり乾燥しない状態になります。一度嫌気発酵すると、その後に切り返しても好気性菌の活動に適した環境を整えることは著しく困難ですので、適切な切り返しは好気性発酵処理の前提条件の一つです。

気温が高い夏季の切り返し作業は、空気を堆肥内に取り込むように行うことが鉄則です。しかし、寒冷地で外気温が低い冬季は、頻繁な切り返しは避け、切り返し作業は堆肥原料を置いていくように切り返し、堆積することで発酵熱の発散を最小限に押さえることが、冬季の切り返し作業の要点です。

(5) 温度計での確認

堆肥化の促進には、原材料の発酵状況を的確に把握し、温度があまり下がらない前に切り返しを行うことが、発酵を良好に維持する条件です。発酵温度を常に確認することが必要です。

温度の測定は、専用の温度計で行いますが測定位置によって温度差が大きいため、好気性微生物が活発に活動している堆肥原料の表層より70cm～1mでの測定が適切です。

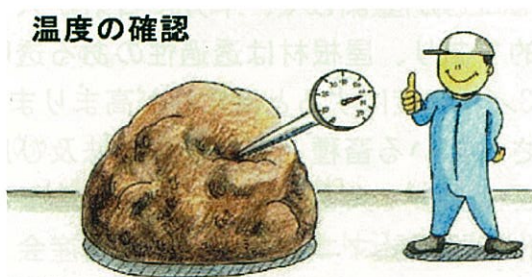
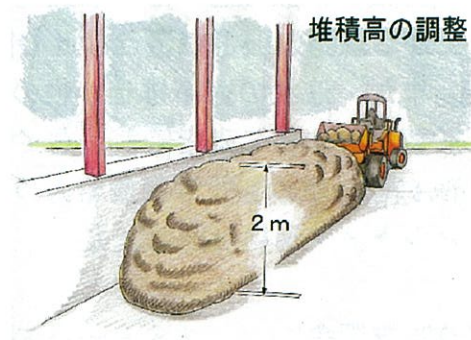
通常 of 切り返しによる堆積後の温度は60℃以上になるのが一般的で、もし温度の上昇が見られない場合は、①すでに堆肥原料の有機物の分解がかなり進んでいるか、②水分や空気の不足により好気性微生物の働きが押さえられているか等の理由が考えられます。

(6) 発酵状況の確認

堆肥化の進行状況は、視覚と臭覚で確認することが出来ます。視覚による判断は堆肥原料の色調で行われ、①酸素の供給が十分で堆肥化が進むと堆肥原料は黒褐色を帯びて来て、②さらに進むと敷料など混合物の形状が壊れ、③その後、表層付近に放線菌や糸状菌による白色の菌糸が見られるようになり、この時点では発酵が終息に近い状態となっています。

なお、適切な切り返し作業が行われず、嫌気発酵した部分は黄緑色を呈してきます。

堆積した原材料の中央部は、視覚での確認ができませんが、この場合は臭覚で確認することとなります。切り返しの時に好氣的に発酵している部位は堆肥臭となり、逆に嫌氣的発酵部位の場合には悪臭を放つので、好氣的発酵か嫌氣的発酵かを容易に判断することができます。





5. 堆肥処理施設

(1) 処理・保管施設

家畜排せつ物法の「家畜排せつ物の処理又は保管用に供する施設の構造設備に関する基準」では、「固形状の家畜排せつ物の管理施設は、床面を不浸透性材料（コンクリート等汚水が浸透しないもの）で構築し、適当な覆い及び側壁を設けること」と定められています。

ふんや尿を敷料等で吸着させ固形状になったものを管理するための施設としては、堆肥舎や乾燥施設が一般的です。この基準では、このような施設から汚水が飛散したり、流失したりすることのないように、床をコンクリートで打設したり、防水シートを敷いたりすることが求められています。

屋根の付設は必ずしも義務付けられるものではなく、防水シートを敷き上から被覆シートで覆うなどの簡易な方法であっても良いとされています。

また、液状の家畜排せつ物の管理については、不浸透性材料で設置した貯留槽とすることとされ、尿やスラリーと言った液状の家畜排せつ物を管理するための施設は尿溜やスラリートankが一般的ですが、不浸透性の防水シートを用いた貯留でも良いとされています。

(2) 堆肥舎

- 1) 堆肥舎は、太陽熱を利用することが望ましく、十分に日射が入り込むよう開放面は南向きが理想的であり、屋根材は透過性のある透明樹脂板を用います。屋根傾斜は、3/10程度にすると滑雪性が高まります。
- 2) 堆肥舎の必要面積は、飼養されている畜種と飼養管理方法及び用いられる敷料並びに処理方法などによって大きく異なります。必要面積の算出に関する詳細は、堆肥化施設設計マニュアル（中央畜産会：平成12年10月30日発行）等の資料に掲載されているので参照して下さい。
- 3) 堆肥舎での作業は、ホイールローダなどで堆積した堆肥原料の切り返しが主体となるので、床はバケットの衝撃や凍結深度に耐える強度が